

パンのある幸せな食卓を

『パン屋、ジビエ料理に挑戦!!(5)』

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

巷 で「肩で風切って歩く」という表現があります。もつとえば歩いて歩くと、「脚で風を切る」になるという話を不良グループから聞いたことがあります。

しかし山の中で足で風を切ってしまうと、下草を払う音がしてしまいます。音に敏感なシカに自分の存在を気づかれて、逃げられてしまいます。よって自然界ではえはって歩くのではなく、常にそろりそろりと音に気を付けながら、獲物を探すために目を凝らしながら、時として背後からヒゲマが襲ってこないか振り返って確かめながら、ゆっくり歩いて行きます。

おかげで普段ランニングなどをしていない私でも息切れはしない反面、無線機からは「まだ道路に下りてないのか? いまどこだ?」などと、歩みの遅さを叱咤する声が届いてきます。今どこだ? と聞かれても初めての山で地図も持たずに入っていると、「さあどこでしょう?」という残念な答えしかできません。「何が見える?」と聞かれても「木と山」としか答えられない自分の文章能力のなさにただ落胆するのであります。

とそんな時、可愛らしい蝦夷ジカのカップルが仲睦まじく寄り添っている

のを前方70mに発見しました。オスの角は2段で3段目が伸びていることから、3年目のシカのカップルである事が想像されます。見つけたこつち(私)もビックリですが、あつちも「なぜここに人間がいるの?」というキョトンとした顔をしてこちらを見ております。

この距離では弾を当てる自信のなかった私は、「私は敵ではありませんよ」アピールをするために視線を外してゆっくり近づいて行きます。距離50mまで近づいてもシカは事情が呑み込めないのかキョトンとしております。少し距離をとつてもまだこちらを珍しそうに見ています。

私も千載一遇のチャンスでありながらも、このシカカップルの見事な2段角、台形に張り出した首、艶やかに光沢のある毛並に銃を構える事を忘れて見とれてしまいました。しばらくしてカップルは踵を返して稜線の裏に消えて行きました。慌てて銃を構えてももう時すでに遅し、獲物は逃げてしまっておりませんでした。射撃場の練習と違い、自然界では自分のリズムでは物事が進まないという事を痛感するのです。

しばらくまた歩を進めていくと、70m先に見たこともない大きな白いおしりが

目に飛び込んできます。目を凝らしてみると、メスと子ジカで7頭の群れを仕切っている雄ジカのお尻でした。シカに聞こえるのではないかと思えるほどドクドクと心臓の鼓動が鼓膜を刺激します。敵はまだ私の存在に気づいていません。周囲を見渡しても誤射して傷つける対象も見当たりません。ちよつと無理目の距離ですがここは撃つしか選択肢がありません。

「こんな大きなシカを獲ったら今晚のヒーローになっちゃう」、「どうやって1人でこのシカを下ろそう」などと考えながらドーン!と1発外しました。「全ては死んでから考える」まさにこの言葉を心に刻んだ狩猟初日でした。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社プランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

